

# 連載 第34回 福聚山史

池浦 泰憲 文  
及川 一晋 編

## 戦後復興から現代へ

### 4、常円寺本堂再建へ その二

昭和三十九年（一九六四）新春、常円寺より檀信徒に向け本堂再建の概要と寄附の勸募をお願いする書状が発送された。

「健康に新春をお迎えになりました」と深くお慶び申し上げます。当山も終戦以来、既に十九年の春を迎えたわけですが、仏祖の冥加とみな様の護持によつて無一物の灰燼から漸く今日の状態にまで復興することができました。この間、東京都の特別区画整理の実施もあつて境内地、墓地等が大巾に改変され、このためみな様方にも一方ならぬ御心配をおかけしましたが、このほど整理も完了し新宿の地域はめざましい発展成長をみるに至りました。



本堂正面右側の「蓮」のレリーフ

爾来、今日まで長らく当山としては大切な本堂も再建できず申訳ないことと思つていましたが時機も正に熟しましたのでこの度この副都心の地にふさわしい立派な御本堂を建立して仏祖の御影を安置し、一つはみな様の御先祖安住の処として一つは又、繁華な都会地の精神道場として信仰の布教・正法伝道の拠点としての御堂を建立致したいと思ひます。

このため、すでに十数回の準備相談の役員会を開いて協議を重ねた結果次のように決定致しました。（後略）

当時、常円寺の建つ西新宿地域は昭和三十五年（一九六〇）、首都圏整備法により東京都新宿副都心計画が決定され、現在では、多くの高層ビルの建つ地にあつた淀橋浄水場を東村山に移転した。その跡地を中心として新宿駅西口一帯に公園・ビル地下施設などを建設し、新しい業務地域として再開発しようとする計画の緒にあつたが、そのような、副都心の地にふさわしい立派な御本堂の再建が目指された。

この時、檀信徒に示された計画案は、前回触れたように、地階に納骨堂を併設した一階建ての御堂で、昭和四十年（一九六五）一月に起工、同年九月に完成という計画であつた。この勸募状によれば「当山には現在千余の檀家があります。従つて募金総額を檀家数に割当てますと一戸につき平均五万円余となります」としている。昭和四十年の大卒初任給が約

二万円ほどであり、「檀家各位の御事情もそれぞれ各別であつて、この寄附の勸募は容易なことではないとは充分覚悟しております」としながらも、この大事業への協力をお願いしたのであつた。

さて、こうして檀信徒に向け本堂再建の計画が伝えられ、その協力が求められた。昭和三十九年七月にはその落成予想図も披露された。その後、着工時期は昭和四十年七月となつたが、大きな変更もなく進められてきた。しかし、同年七月三日役員会の議事録から、その計画の再検討が決定したことがみえる。

その理由は工費の問題であつた。建設の請負業者から見積もりがだされたが、その額は計画の二・五倍ほどであつた。「それでは到底負擔出来ない故、設計の変更と共に再見積もりをしてもらうことにする」とことなつたのである。それから二週間後の七月十七日、設計を担当する勝田教授より、工費の高む地階建設をやめ二階建ての本堂とすること、また鉄骨ではなく鉄筋とすることによつて経費を節減するとの回答があつた。その方針に沿いもう一度設計をし直し、見積もりさせることに決定し、同年十月八日に再建工事の最終的な見積もりが承認され、十一月には業者と契約し着手した。

以上のように、本堂再建にあつてその資金の調達もつとも困難な問題であつた。本堂再建には建設とともに、堂内の荘厳や付帯工事にも資金が必要となるが、三十九年新春より開始した檀信徒への勸募は、昭和四十一年（一九六六）九月の時点で、九百七十九人から寄附があつた。これにこれまでの積み立て等を合せて費用がまかなわれ、昭和四十一年



高木俱之氏により描かれた本堂壁面の画

十月三十日、ようやくその落成を迎えたのであつた。

ところで、現在堂内の正面の壁面には「日」と「蓮」を表したレリーフが、また左右と後方の壁には日蓮聖人の「一生を表した絵画が描かれている。これは再建にあつて檀家の高木俱之氏により制作されたものである。その設計が檀家の勝田氏であつたこと、さらには千人近い檀信徒の寄附と、住職、総代、世話人を先頭に常円寺檀信徒が一致して「百年に一度二百年に果たして遇えるかどうかの御本堂建立の仏縁を結ぶ」（昭和三十九年勸募状より）ことにより結実したものであつた。